

日本人と杜

山の聖地が生み出す生物文化多様性

宮崎公立大学教授 永松 敦

1. はじめに

日本は工業先進国でありながら、生物多様性の豊かな国として知られている。日本人と自然との関わり方については、総合地球環境学研究所の研究プロジェクト「日本列島における人間—自然相互関係の歴史的・文化的検討—」（2006～2010年度 研究代表者 湯本貴和）において、日本列島全域を対象に、自然科学・人文科学の様々な立場から研究が行われた。その成果は『シリーズ日本列島の三万五千年—人と自然の環境史』（全6巻）として結実している¹。日本人にとって杜^{もり}をイメージすると、神社の境内、とりわけ鬱蒼とした巨木が聳え立つ光景を思い浮かべられるだろう。山川草木のすべてに神々が宿り人々が足を踏み入れることも指で触れることさえも憚られるような神聖さ、それが日本人にとっての聖域と考える人は少なくない。

モリをテーマとして取り上げる場合、日本人は「森」と「杜」という二つの概念を持ち合わせていることに気付く。森は、森林という用語があるように、樹木の群がり生えるところを意味し、林よりは、自然植生の豊かなところを指すとされる²。これに対して、杜は、神社の聖域などを指す場合が多い。『国史大辞典』の藪田稔が執筆担当した「神社」の項目によると、平安期までは社^{やしろ}と杜の概念は曖昧で、『延喜式』の「神名帳」では、「宮」と記す神社が11社あるのに対して「社」は2861社に上るといふ。さらに言えば、『万葉集』や古風土記（播磨・肥前）には、「社」と「杜」をいずれもモリと訓む例があることから、杜は、樹叢に囲まれた社、すなわち神社を意味していたことになる。このことから、藪田は神社を形成する以下の3種類を想

定している³。

- ① 杜すなわち森に囲まれた神祭りの聖地そのもの
- ② 神祭りの聖地に臨時に屋舎を設けたもの
- ③ 神祭りの聖地に常設の神殿を建てたもの

民俗学の立場で言えば、モリは聖域を意味し、そのなかに小さな祠が祭られている場合が多い。福井県若狭地方のニソの杜、中国地方の荒神森、鹿児島島のモイドン（森殿）など、使用される漢字の「杜」「森」の混同はあるものの、共通してそこには「モリガミ」の信仰がある。これらの杜は決して広大なものではなく、小規模な杜で、神や先祖を祭る聖地とするところがほとんどである。

ところで、平野部の聖域となる杜に対して、山間部の森林については、どのように信仰されてきたのだろうか。聖域とされる山岳、特に、山岳霊場とされる熊野や立山、伯耆大山などでは獵師が山を切り開き、霊場を生み出すことが各地の寺社縁起などに語り継がれている。これは狩人寺院開創説話というもので、大まかに言えば、獵師が山中で摩訶不思議な体験をしたことにより発心して仏堂を建立し、その後、獵師は殺生を止め、仏道に帰依するという内容である。このような寺院縁起が創られるのは、獵師が山の神を祭る宗教者であったからだと一般的には考えられている。

ただ、一度、宗教的に聖域化してしまえば、聖域とされる地域内の草木や動物は利用されないのだろうか。日本人にとっての聖域とは、全く自然に手を触れない状態で保持し続けていくことなのかを、今一度、ここで民俗学の立場から考え直してみることにしよう。

2. 神々の杜

山そのものがご神体だとされる大和の国、三輪山。神話の世界で、現在の天皇家につながる天孫一族が国を譲り受けた出雲の神、オオクニヌシの神と同体とするオオモノヌシの神を祭ると伝えられる。1318（文保2）年の『三輪山大明神縁起』によると、三輪山の社殿は「木を以て輪を結びて、社殿となす」ので、三輪と称するようになったと語り、さらに、古老の口

伝によれば、その輪は、五木によって作られるとしている。その五木とは、「檜・柞・椿・青木・桜」とされる。この五木で御殿（社殿）を作るといふ。霊神は三霊木によって御体を作るとされ、この木は、「松・杉・榎」の3種だとされる。

それでは、いつの頃から、山全体がご神体となったのだろうか。山岳修験の研究者、五来重は近世以後のこととみている。江戸時代に、三輪山を巡って神社と神宮寺の間で、樹木の伐採や石の採取などについて論争が起り、1666（寛文6）年に、縦20町、横4町が立入禁止となった。しかし、その後も争いは起り、1810（文化7）年、神社側は奉行所に訴えを起こしている。訴状に、「禁足山を以て御神体と拝み奉り、大切之場所二御座候」と記されていることから、山中の木や石の乱獲を防ぐための禁足地としたところを「ご神体」として拝礼する聖地としたことが認められる。それは、今から僅か2世紀ほど前のことなのである⁴。

山が神々を祭る聖地であることには異論はない。しかし、すべての山が聖地となるわけではない。今見たように、三輪山のような古代からの信仰の厚い地であったとしても、神を祭る場合は、松・杉・榎でご神体を作るとあることから、自然のままの木ではなく、伐採してご神体を作るのであり、社殿も5種類の樹木を輪の状態に結んだものであるから、恒久的な構造物が存在するわけではないのである。つまり、神々の宿る木は複数あり、神木となる木の一部を伐採してご神体や社を作っていたということが重要である。神社の境内は、手つかずの神聖な杜ではなく、人が手を加える神聖な杜なのである。神社の杜を考えるうえで、非常に興味深い事例が熊本県山都町清和に伝えられている。

ここに鎮座する小松神社は小高い山上にあり、旧暦4月4日の祭礼に、かつては独身の男女が登拝する習慣があった。険しい山道を登ることで、男女が手を取り合い夫婦となることが多かったということで、縁結びの神として知られた。このときの出会いで夫婦となった二人は、次の年の祭礼にお礼参りとして山に登り、実のなる木を植えるのが習わしであった。このため、神社の杜はドングリなどの実のなる木で覆われることになったという。神社には、結婚願望の落書が今も残っている。

生態民俗学の代表的学者である野本寛一は、『万葉集』巻第7の歌に、



写真 1 十根川の大杉

片岡のこの向つ峰に椎蒔かば
今年の夏の陰に比へむか(1099)

とあることから、日本には古くから木種播きの習俗があったことを指摘している⁵。民俗事例として、山の神祭りの日に、山の神が木種を播くので入山してはならないとする禁忌は全国各地で聞かれており、木種を播くことが実際に行われていたものと推定することができる⁶。

聖地は天然林だけではなく、人為的に神木となるクスノキやスギの木などを植樹した可能性は高いのである。平家落人の村として知られる宮

崎県椎葉村には、平家追討の命を受けた那須与一の弟とされる那須大八郎が植樹したという八村杉が、十根川神社のご神木として聳え立つ(写真1)。このような植樹伝承は、弘法大師が杖を立てたところが、後に大銀杏の木になったというように語り継がれる弘法大師杖立伝説ともつながるもので、全国各地で聞くことができる。このように見ると、先に述べた三輪のご神体と社殿となる樹木は、人為的に植樹された可能性も十分あると言わねばならない。聖地の植生の豊かさは、こうした人為的な杜作りにあったと考えられるのである。

3. 山の環境を守る猟師

それでは、山岳地帯の森林はどのようにして維持されてきたのだろうか。冒頭にも述べたように、山岳寺院は猟師とのつながりで語られることが多い。猟師は山々を駆け巡り獲物を追い求めるが、決して狩猟だけを生業としているわけではない。山々で畑を耕し、急斜面では焼畑を営み、地域によっては水稻耕作に従事しているところもある。岩手県西和賀町の熊狩りをする

マタギたちは、近世に新田開発をしていたことが絵図から知ることができる⁷⁾。つまり、山での生業に従事する者は、1カ所だけに留まるのではなく、広範囲の山野において複数の生業に関わりながら生計を立てていたという事になる。このため信仰の世界でも、必然的に、狩猟や焼畑、



写真2 ししまつり

稲作農耕などの神々を祭るため、それぞれに応じた複数の聖地、聖域を有することになる。ただ、一つの場所だけを結界でくくり、神聖視し信仰しているわけではないのである。

それでは、なぜ、複合生業を営む猟師が、山の司祭者となりえるのか、が問題となる。これまでの通説は、猟師が山の神を司祭するので、仏教寺院もまた、その延長線上で信仰され、建立されたとしている。

猟師が山の神々を司祭する儀礼が、宮崎県椎葉村に今も伝えられている。それは、椎葉村内でも熊本県との境に近い尾前^{おまえ}という山深い集落の冬祭りに見ることができる。同地域の冬の祭礼は、夜神楽である。夕方から神楽を舞い始めて、夜を徹して夜が明けるまで神楽を舞い続けるというのが一般的だ。神楽の開始に先立って、この地区では、猪や鹿などの大きな獲物がある場合に限って、「ししまつり」という特殊な儀礼を行う（写真2）。

猟師は俎板上に載った獲物の前に着座する。猟師は「諏訪の祓」という唱え言で獲物を祓い清め、続いて、ししまつりの唱え言を語る。

かぶがしらをもっては、天大しょうごん殿に祭って参らせ申す

かぶふたをもっては、奥山三郎殿に祭って参らせ申す

こひつぎあばらをもっては、中山次郎殿に祭って参らせ申す

奥山三郎殿三百三十三人、中山次郎殿の三百三十三人、山口太郎殿の三百三十三人

あわせて、九百九十九人の御山^{みやま}の御神様にも祭って参らせ申す

下のこうざき、上のこうざき、かみなり、中頃のこうざき、只今のこうざき殿まで祭って参らせ申す、おざさ山のこうざき、上ノ小屋山、かみなりかどわりのこうざき殿にも祭って参らせ申す、あろう谷からふるこえの間まで木の根、茅の根の下にまつりあらしのこうざき殿まで、小獵師のまつりてを差し上げ申するによって、三丸五丸七丸十三丸三三丸一〇六丸までのやくごんを奉り申するによって、その上はのされ次第、御授け下さりゅうところを偏に御願ひ奉り申す

この唱え言は、かぶがしら（頭部）^{もつ}で以て、天大しょうごん殿、かぶふた（尻部）で以て、奥山三郎殿、こひつぎあばら（肋骨）を以ては、中山二郎殿という神々に祭ることを説いている。さらに、山中で祭られる奥山・中山・山口の三カ所の山の神をも祭るとしている。続いて、興味深いのが、各山に祭られたコウザキと、木の根、茅の根の下に祭り荒らしたコウザキまで祭るとしている点である。コウザキとは狩猟の神で、獲物を捕獲し解体した場所に、御幣と獲物の内臓を七切れ串刺しにしたものを供える。このため、獲物の解体の場が一時的に、コウザキを祭る聖域となるわけで、山のあちこちに「祭り荒らした」という表現が用いられているのである。この時の七切れの肉の串刺しが、唱え言のなかで語られる「小獵師のまつりて」なのである。

獵師が山中の山の神やコウザキなど、複数の神々を祭る司祭者としての役割を担っていることが認められる。現在、伝承されている唱え言からは、山の神とコウザキだけが祭られているように見受けられるが、近世の狩猟文書ではこの作法を「かけぬい」と称して、獲物の各部分の肉や骨でもって、狩猟の神から農耕の神、屋敷の神など様々な神々を祭っていることが明記されている。獵師が山村のすべての神々の司祭者となるのは、動物の肉や骨を^{にえ}贅として捧げることができるからなのである。

獵師の祭る神々のなかには、山中で遭遇すると命を失うとされるセゴゴと呼ばれる妖怪もあることが注目される⁸。

つまり、山村、山中の至る所に、神々や妖怪たちが宿るとされる巨木や石、小祠などを祭り、その周囲を杜として神聖視してきたのである。やがて、あちこちで祭られたところに、目印として植樹した樹木が巨木となり、その周囲が森として形成されることが多い。山の民の生産活動は神々の信仰なしに

ありえない。このため、各地に神々を祭る小規模な杜が作られるようになる。そのなかには、先ほど述べたセコゴや天狗、姥などの妖怪が棲むとされる樹木なども存在している。人々の生活を守る神々と人々に災いをなす妖怪（厳密には、山姥のように祟りもなすが、子供の守り神となる場合もある）とを祭る聖地が山中の至る所に作られていく。やがて、その樹木が杜を作り、人々から神聖視され自然に守られるようになる。杜は人々の信仰によって作られていくものなのである（写真3）。



写真3 山の民の信仰

神々や妖怪の種類は、狩猟や、次節で述べる焼畑耕作、森林の間伐などの人為的な影響によって生み出された生物多様性に比例して、生み出されていくと考えられるのである。

4. 広がる聖地

九州山間部の山村では、拡大造林が活発化する昭和30年代までは焼畑耕作が盛んに行われていた。現在でも一部、宮崎県の椎葉村や西米良村などには残っている。

2011年に、宮崎県西都市^{しろみ}銀鏡地域で、約半世紀ぶりに焼畑が復元された。

山の斜面の伐採する前に、1本だけ残す木を決めておく。先端の枝葉だけを残して、その他の枝をすべて切り落とす。この木をセビと呼び、山の神の休み処だとされる（写真4）。3反ほどの広さのコバ（焼畑の耕作地）を伐り開くと、今まで鬱蒼としていた森に急に光が照り付ける。1カ月後に火入れをするときには、雑草や木々が日光を浴びて一斉に芽吹く（写真5）。このとき、山村で重要な作物は山茶で、かつて先祖が植えた茶の実や根から、まるで地面から湧き出るように茶の木が繁茂する（写真6）。近世では山茶



写真4 焼畑のセビ



写真5 焼畑火入れ

は重要な換金作物であった。火入れの前には、木下ろし歌という枝払いをするときの歌を歌い、セビの木に、鉋で7カ所切れ目を入れて、神酒を捧げて安全を祈願する。その後、火入れとなり、数時間後には、ソバやダイコンの播種が行われる(写真7)。火入れは男性の役割で、播種は女性が行う。それは、女性が山の神であり、豊作を祈願するためでもある。

焼畑は、ヒエ、アワ、ダイコン、ソバ、ダイズ、アズキなどを4、5年かけて輪作し、元の森に戻す。休閑期間が長いほど、次の焼畑では雑草が生えにくいとされる。焼畑は10～15年ほど土地を休ませ、再び、森を伐り、木々を焼き耕作を行う循環型の農耕を行う。肥料は一切用いず、木々を焼いた後の灰、休閑期間に蓄積された腐葉土などで十分栄養分は賄える。春先には、ワラビ、ゼンマイ、サド(イタドリ)など山菜の宝庫となり、乾燥させて冬の保存食を作る。

山の民は、森の間伐や火入れによる山野草の収穫、焼畑耕作などによって食料を確保してきた。その食料は人間のためだけではない。それは、野生獣の大切な食料でもある。農耕を営む立場からすれば害獣ではあるが、猟師にとって耕作跡地は格好の猟場だ。そして、山の民にとっての冬のタンパク源



写真6 自生する山茶



写真7 ダイコンとソバ

の確保につながるのである。

焼畑は毎年、場所を変えて、山の一部を伐採し、火を放つ。そのため各地で、目印となる大木を1本残し、山の神を祭ることになる。神木となる木が毎年、1本ずつ増えることになる。古木を残し、4～5年の耕作後は休閑期となり、やがて、若い自然林に生まれ変わることになる。

その植生は豊かであり、生物たちの拠り所となる。まさに、伝統的な焼畑農法は生物多様性に貢献していると言えるだろう。

5. 池をご神体とする神社—宮崎県新富町 水沼神社

聖地における自然観を考えるために、杜の問題からは外れるが、湖沼をご神体とする事例を紹介しよう。

宮崎県新富町に、湖水ヶ池をご神体とする水沼神社が鎮座している。江戸時代、高鍋藩の記録である『本藩実録』をひもとくと、湖水ヶ池で雨乞いがあったことが記され、池そのものをご神体としていることが認められる。この池には、ハスが繁茂している（写真8）。水神様のレンコンで親しまれており、氏子のみがレンコンを収穫する権利を有している。

伝承では、江戸時代、高鍋藩7代藩主、秋月種茂（1744～1819）が藩内飢饉のため、大和の国からレンコンをこの地にもたらしたという。当初は高鍋城の堀に植えたが失敗し、各地で試行錯誤を繰り返したところ、湖水ヶ池



写真8 水沼神社と湖水ヶ池



写真9 水神様のレンコン

で栽培に成功したという。人々は水神様を祭る場所であったことから、水神様のレンコンと呼ばれる慣わして今日まで大切に受け継いでいる。これまで高鍋藩の記録『本藩実録』などの史料にレンコンの記載が全く見られなかったことから、単なる口碑と捉えられていた。湖水ヶ池のレンコンは、色が白く、細くて長い。繊維質が多く、口に含むとヤマイモのように糸を引くことから、糸引きレンコンとも呼ばれる極めて特殊なレンコンである（写真9）。

筆者は同種のレンコンが奈良県にあるのではないかと考え各地を歩いた。すると、大和郡山市の筒井城の堀で栽培されているレンコンが極めて近い食感であることを突き止めた。葉を採取し、

南九州大学環境園芸学部の陳蘭庄教授にDNAの解析を依頼したところ、宮崎県新富町のレンコンと、奈良県大和郡山市のレンコンのDNAはほぼ一致していた⁹。もちろん、DNAが一致したからといって、同系統の品種であることは証明できても、筒井城のレンコンが直接、日向の湖水ヶ池にもたらされたという証明にはならない。ここで重要なことは、雨乞いなど聖地として信仰されてきた湖水ヶ池に、他所からレンコンを持ち込み栽培した事実があったということである。しかも、他所からもちこんだ作物が「水神様のレンコン」として受け継がれ、氏子たちの宝となっていることである。

これまで見てきたように、古代から人々が聖地に樹木をもたらし、ご神木、または、鎮守の杜として絶えず育ててきた信仰形態が、近世の湖沼において

も他所からの作物を育成し、水神様の授かり物として信仰するところにつながっていることが重要なのである。日本人の自然に対する関わり方は、聖域を手つかずの状態で保存するのではなく、絶えず、新たな樹木や作物を移入し、生態系を豊かに発展させつつ、神の木、神の作物として崇拜し大切に育成し続けてきたということが特色だと言ってよい。

6. おわりに

山、杜での生物多様性を語るときに、必ず生業と信仰といった民俗の問題が強く関わることを指摘しておく必要がある。日本人は山や杜に対して、神聖な感情を抱くことは確かであるが、また、一方では、山姥、鬼、天狗などが棲む恐ろしい世界をイメージするという、相反する感情を抱いている。それは、山がこの世から見ると異界であり、人間の力が及ばない異次元の空間であるからにはかならない。

本稿では、山や杜の生物多様性を焼畑・狩猟などの生業面と、山の神や妖怪といった信仰面から考察した。長い歴史の中で、人々は山や杜に植樹し、人間と自然とが共に聖なる空間を形成してきたと言えるだろう。聖域に対する語りも、神が鎮座しているため聖域とされているところと、鬼や妖怪が棲んでいるので触れてはならないといった忌避される地域とが入りまじり、植生の豊かさとそこで生息する生物の多様性を生み出すといった半自然的な杜を作り上げたといっても過言ではない。

数年前、世界自然遺産の白神山地をマタギの方と歩いたことがある。春先には断崖の地でゼンマイを採取し、秋にはキノコを採り、アラキと呼ばれる焼畑を営みながら、ミズナラの林を育て、炭を焼いていたという。古木を伐採して利用し、火を入れて新たな森に戻す作業を繰り返し行ってきた。当然、熊狩りも行ってきた。ところが、世界遺産に認定されたエリアではこうした生業を営むことができなくなったと語っていたのが印象的であった。

また、山形県小国町では、熊狩りをする猟師たちが、5月に行われる熊祭りを一般に公開し、このとき、熊狩りの模擬演技を見せて人々を楽しませている。熊を鉄砲で威嚇するのは、人間と動物との生活圏を区分するための行為で、種の保存のための狩猟だと力説していた。

日本の生物多様性は、世界自然遺産や文化財指定などの保護政策ではなく、むしろ、人々の生活の中から、民俗知識のもとで作り上げられていったと言ってよい。聖なる杜への植樹や、湖水ヶ池という聖域に新たな栽培作物の導入を図り、水神様の授かり物だと認識する人々の思考法が、我が国の豊かな生態系を育んできたのである。

今後、自然保護に関する政策を論じるとき、数多の人々の民俗知識を、有効に、且つ、積極的に活用する術を是非、検討してもらいたい。

〔参考文献〕

- 1 湯本貴和編『シリーズ日本列島の三万五千年一人と自然の環境史』全6巻 2011 文一総合出版
- 2 中川重年「もり」（『日本民俗大辞典』下巻 2000 吉川弘文館）
- 3 藪田稔「神社」（『国史大辞典』第7巻 1986 吉川弘文館）
- 4 五来重「大和三輪山の山岳信仰」（『修験道霊山の歴史と信仰』五来重著作集 第6巻所収）2008 法蔵館
- 5 野本寛一『生態と民俗 人と動植物の相渉譜』第1章「巨樹と神の森」2008 講談社学術文庫
- 6 野本寛一『神と自然の景観論 信仰環境を読む』第4章「環境保全の民俗と伝承」2006 講談社学術文庫
- 7 永松敦『狩猟民俗研究—近世獵師の実像と伝承—』2005 法蔵館
- 8 永松敦『狩猟民俗と修験道』第2章第3節「奥日向の霜月神楽と動物供儀—椎葉神楽「板起こし」—」1993 白水社
- 9 永松敦「民俗学から見た在来野菜の研究」（宮崎大学産学・地域連携センター第21回技術・研究発表交流会 ポスター発表 2014）



永松 敦（ながまつ・あつし）

宮崎公立大学教授。専門は民俗学。特に、狩猟、焼畑などの非稲作文化を中心に研究を続け、近年は、野焼きや地域在来野菜の調査研究を進めている。主要著書に、『狩猟民俗研究—近世獵師の実像と展開—』『九州の民俗芸能』などがある。1958年生まれ。

